令和４年度岩手県スモン患者検診結果

千田　圭二（国立病院機構岩手病院脳神経内科）
竪山　真規（国立病院機構岩手病院脳神経内科）
懸田　　恵（国立病院機構岩手病院看護部）
鈴木　直美（国立病院機構岩手病院地域医療連携室）
鳥畑　桃子（国立病院機構岩手病院地域医療連携室）
竹越　友則（国立病院機構岩手病院地域医療連携室）
鈴木　菜央（国立病院機構岩手病院リハビリテーション科）
我妻　佑紀（国立病院機構岩手病院リハビリテーション科）
佐賀　唯衣（岩手県県央保健所）

研究要旨

岩手県在住のスモン患者10名のうち、9名について検診を行い、身体的、精神的、社会的な状態を調査し検討した。検診受診者は女性8名、男性1名で年齢は平均81.1歳、発症からの期間は平均56.6年であった。歩行は独歩3名、一本杖で可能2名、歩行器1名, 車いす2名、不能が1名であった。異常知覚は軽度3名、中等度2名、高度2名、不明1名、1名でむずむず脚症候群による新たな感覚障害が認められた。身体的併発症は全員で認められ、白内障6名、腰痛などの脊椎疾患が6名、膝をはじめとした四肢関節疾患5名、骨折2名、循環器疾患4名、腎・泌尿器疾患8名などであった。精神症候は全員で認められ、不安焦燥4名、抑うつ3名、記憶力の低下8名（88.9%）であった。測定できた8名でのBarthel Indexは90点以上が4名、75点から90点未満が3名、45点1名、25点1名であった。生活場所は自宅独居4名、自宅同居者あり3名、施設が2名であった。介護認定は未申請1名、要介護1 3名、要介護2　2名、要介護3　2名、要介護4　1名であった。7名が介護に対する不安があると答えた。スモン後遺症に加えて、加齢に伴う身体精神機能の衰えと併発症により介護の必要性が増していると考えられた。

A．研究目的

岩手県在住のスモン患者の身体的、精神的、社会的な状態を明らかにする。

B．研究方法

岩手県内に在住するスモン患者の検診を行い、検診結果を研究利用することについて同意を得た患者の「スモン現状調査個人票」「ADLおよび介護に関する現状調査」の結果を集計し分析した。研究に際してプライバシーの保護に留意した。

C．研究結果

1．検診方法と検診者数

岩手県内のスモン患者は10名であった。7名に検診（来所検診3名、自宅・施設への訪問検診4名）を行った（**図1**、**図2**）。検診は医師、看護師、理学療法士、医療社会福祉士、保健師でチームを組んで行った。対面検診を希望しなかった患者のうち2名には電話で家族、施設職員からの聞き取りを行い、可能な範囲での現状把握を行った。対面検診、電話検診を合わせると9名で検診率90%であった。検診受診者は男性1

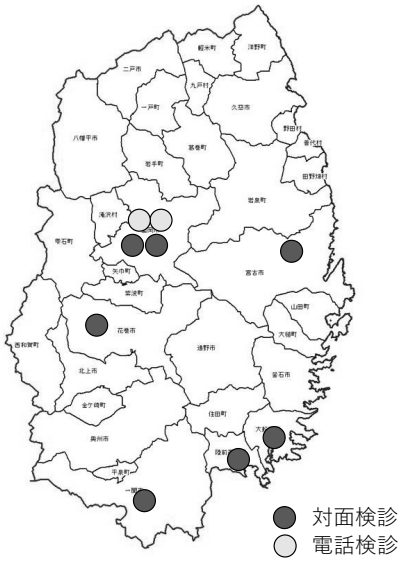

図１　患者の居住地と検診方法

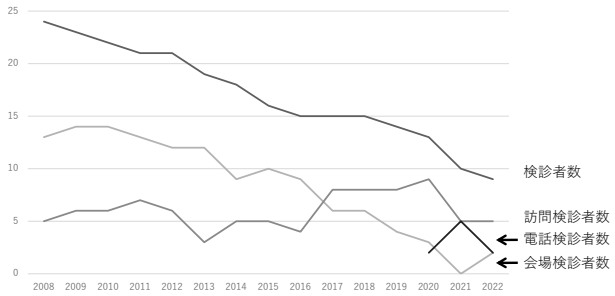

図２　検診者数の推移

名、女性８名で年齢は 69 歳から 98 歳（平均 81.1 歳）、発症からの期間は 52 年から 62 年（平均 56.6 年）であった。

２．身体の状況

視力について新聞は読める３名、大見出しは読める５名で、老眼５名、白内障６名、黄斑変性症１名、硝子体出血１名の合併が認められた。下肢筋力低下はなし１名、軽度４名、高度２名であった。起立位は継ぎ足が可能１名、閉脚で起立２名、開脚で起立１名、支えて可能３名、不能１名であった。歩行は独歩３名、一本杖で可能２名、歩行器１名、車いす２名、不能が１名であった。外出は遠くまで可能１名、近所まで可能２名、介助で可能４名、不能２名であった。知覚障害について異常知覚は軽度３名、中等度２名、高度２名、不明１名、１名でむずむず脚症候群による新たな感覚障害が認められた。振動覚障害は軽度２名、中等度１名、高度４名であった。胃腸症状について、なし３名、あるが気にならない５名、不明など１名で、ときどき下痢３名、時々便秘２名、常に便秘２名であった。身体的併発症は全員で認められ、白内障６名、腰痛などの脊椎疾患が６名、膝をはじめとした四肢関節疾患５名、骨折２名であった。循環器疾患４名（心不全、不整脈、高血圧症）、腎・泌尿器疾患８名（頻尿・過活動膀胱、腎機能低下、前立腺がん）、消化器疾患（逆流性食道炎、潰瘍性大腸炎）などが認められた。４名が過去１年間に転倒、２名が転倒しそうになったことがあった。

３．精神症候の状況

精神症候は全員で認められ、不安焦燥４名、抑うつ３名、記憶力の低下８名（88.9%）であった。１名がレビー小体型認知症として治療中であった。診察時の障害度は軽度２名、中等度３名、重度２名、不明２名で、障害要因はスモンによる障害に併発症が加わったためが６名（70%）、併発症１名、不明１名であった。

４．ADL と介護の状況

測定できた８名での Barthel Index は 90 点以上が４名、75 点から 90 点未満が３名、45 点１名、25 点１名であった。生活の満足度はどちらかといえば満足３名、何とも言えない２名、どちらかといえば不満４名であった。生活場所は自宅７名、そのうち４名は独居、施設が２名であった。介護の状況は介護不要２名、必要な時に介護６名、毎日介護１名で、７名が何らかの介護を要していた。介護認定は未申請１名、要介護１　３名、要介護２　２名、要介護３　２名、要介護４　１名であった。認定された介護度について、４名が妥当と思う、４名が低いと思うと答えた。７名が介護に対する不安があると答えた。患者が訴えた不安の中には、独居に限界を感じ施設入所の希望はあるが施設入所の際の経済的負担に不安があること、自宅が山奥にあり福祉サービスが十分うけられるか心配であることなどがあった。スモンであることを知られたくないと話された患者もいた。

D．考察

2022年度の結果を2002年度の検診結果と比較した[1)]。2002年度18名の平均年齢は70.9歳、2022年度9名は81.1歳であり杖歩行以上の歩行能力を有しているのは2002年度90%、2022年度56%と減少した。介護認定を受けているのは2002年度33%に対し2022年度89%、介護を必要としている患者の割合は2002年度16%に対し2022年度78%と増加していた。生活の満足度で満足あるいはどちらかといえば満足が2002年度61.5%から2022年度33%に低下していた。併発症では記憶力低下（自覚や不安、あるいは認知症を発症している患者を含む）が2002年度27.8%に対して2022年度89%と増加していた。20年間で、スモン後遺症に加えて、加齢に伴う運動機能、精神機能の低下と併発症により、日常生活能力が低下し介護を要する患者の割合が増加していると考えれらた。

本年度は会場検診、訪問検診を7名で行うことができた。新型コロナ感染症蔓延の影響と高齢や併発症による体調不良により、対面での検診が困難になった患者については電話での聞き取りをおこなった。対面検診では、多職種で関わることができ、患者さんの相談に対応しやすい利点がある。スモンであることを知られたくないと考えている患者さんにとっては、唯一の相談の場になっている。今後も可能な限り対面での検診を続ける工夫をしていきたい。

介護を実際にうけている患者の割合は増え、介護に対する不安を持っている患者は多かった。また介護認定は低いと感じている患者も多く、認定する機関の担当者にスモンについて、特に客観的に把握しづらい異常知覚などの感覚障害などについての理解を深めてもらう働きかけも必要と考えられた。

E．結論

スモン後遺症に加えて、加齢や併発症による身体機能および精神機能の低下により、介護の必要度は高まっており、ほとんどの患者が介護の不安を抱えている。コロナ禍と患者の高齢化により対面による検診の困難さが増している。対面検診と電話での聞き取りなどの工夫により実態を把握して、適切な支援につなげることができるように努めていきたい。

G．研究発表

なし

H．知的財産権の出願

なし

I．文献

1）千田圭二　阿部憲男　大井清文：スモン検診からみた岩手県におけるスモン患者の医療・福祉の現状と問題点．医療 2006：59（1）：3-8